

わきみず

発行者 曹洞宗
普門山 林泉寺
三戸町斗内字寺牛25
0179-25-2850

尚、ご祈祷札は、一月二日以降に取りに来て頂ければと思います。

月で餅つき

今年も檀家さんが一堂に会しての「新年ご祈祷会」は中止とさせて頂き、読み上げの申し込みは受け付けませんが、住職・副住職だけで執り行います。

令和五年 元旦

皆で力を合わせて
楽しく実りのある
一年にしましょう

永寿嘉福



供養開始の進前焼香



供養開始の進前焼香



各家先祖代々
読み上げ



各家先祖代々読み上げ

令和四年 盂蘭盆供養会
令和四年八月十五日

令和四年 秋彼岸供養会
令和四年九月二十三日

令和五年 新春祈祷会 令和五年元旦



各家先祖代々読み上げ



理趣分転読



須弥壇荘厳

六曜と迷信について

「六曜」は古代中国の思想が日本に伝わり江戸時代に定着したもので、元来は時間を区切る世俗的指標として、六日ごとのサイクルを定めたものです。それが逆に日にちの吉凶として、人々の行動や生活を左右し、縛る方向へと定着していった側面もあります。

たとえば、「仏滅」の「仏」はもともと「物」という字だったのですが、明治時代、曆業者が「仏」の字を当てて広めたことにより、仏教と関係のあるように思われるようになりました。また、結婚式等で吉日とされる「大安」は江戸時代には「泰安」、「友引」は「午前」と「午後」の間で「ひきわけ」(共引)と言われたようですが、全く仏教の教えとは関係がありません。

本来、禅の教えとは「日に吉凶無し」「日日是好日」であり、尊くない日は一日もありません。

私たちは、正しい教えにもとづいた見方や考え方を持って迷信や俗信、悪しき「習わし」や「しきたり」を断じる意識を持つことが肝要です。そして、偏見や迷信もたらすあらゆる差別の解消と人権確立のために取り組んでいきたいものです。

本年も宜しく
副住職 飯原 拓啓
住職 美絹 啓誠
花貴子 拓誠
合掌 合掌

新年を迎える楽しみ



除夜の鐘を境いに新年が始まります。新しい年を、どのような気持ちでお迎えしたらよいでしょうか。幼い頃は、お正月を迎えるのが、今よりずっと待ち遠しかった気がします。師走になると大掃除を始め、お餅用の材料を調達します。門松をたててしめ縄をはり、鏡餅をお供えして、大晦日を待ちました。



いよいよ新年を迎えると、初日の出を拝み、初詣をします。家族一同が顔を揃えるのと、新年の挨拶を済ませ、杯を回してお屠蘇を飲み、お節料理を頂きます。お年玉を頂戴する楽しみは勿論でしたが、皆がおめかしをして、華やいで元旦を迎えるのが嬉しく、また子供ながらに厳粛な気持ちになったのでした。



一年のスター！トを今年は切りたいものです。



一月の和風月名は「睦月」です。「正月は身分の上下なく、また老いも若きもお互いに往来して拝賀し、親族一同集まって娯楽遊宴するという睦月」の意であり、このムツビツキという言葉が訛ってムツキという説が有力だそうです。



普段中々一緒に過ごすことにできない家族親族、ゆつたりとした時間に寛ぎ、お互いの抱負や希望を語り合うことができたなら素敵ですね。



子供達が幼い頃の我が家のさやかな楽しみは、それぞれの初夢を披露しあうことでした。夢の中は幻想の世界です。「どんな突飛な世界を夢見ているのか」子供達の頭の中を覗くのは、その成長ぶりを窺うこともできて親にとっても格別でした

初売り

古来日本では、この初夢の内容で、一年の吉凶を占う風習がありました。

江戸時代には七福神の乗った宝船の絵を枕の下に敷いて寝ると、よい夢が見られるとされ、「お宝！お宝！」と売り歩く宝船売りが大変繁盛しました。反対に悪い夢を見ると、夢を食うという想像上の動物「獺」の絵を描いたりしたので



そうした「まじない」を信じ、神仏の力を借りて、庶民は夢にすがったのでした。災いを避けて、幸運を得ようとする人間の切ない気持ちが、ここにも現れているようです。



さて、「夢売り」の習慣は長くは続きましたが、市井(人が多く集まり住む所)の貧しい子供達は、そんな夢さえ買うことができませんでした。

新年の夢

明治三十六年生まれの人金子みずぶさんは、そんな子等のために、優しい詩を残してくれました。

夢売り

年のはじめに夢売りはよい初夢を売りにくるたからの船に山のよう、よい初夢を積んでくる



そしてやさしい夢売りは、夢の買えないうら町の、さびしい子等のところへも、だまって夢をおいてゆく「だまって夢を おいてゆく」という箇所は、みずぶさんの温かさ、慈愛が満ち溢れていますね。

新年の夢

さて、私たちは「夢」という一語に、様々な意味を持たせて、日常使っています。

「夢中になる」我を忘れて一生懸命になる
「夢にも見ない」少しもみたことがない
「夢心地である」何か恍惚としている状態」等々です。
「新年に夢を持って」と言えば、「将来の理想や希望を抱き、それに向かつて確かなビジョンを持つ」と、いうことになります。

時代の閉塞感と共に、現代は夢を描きにくい時代と言われています。若者も大人も、何となく未来に不安を抱え、今を生きることに精一杯と感じている風潮です。でも、そんな時代に流されず、しっかりととした人生設計をしながら「夢」



では、仏教では、この「夢」という一字をどのようなとらえてきたのでしょうか。

『金剛経』の一節には、「一切の有為の法は夢幻泡影の如し露の如く亦た電の如し 応に是の如きの観を作すべし」と、あります。



「この世界の一切の存在は(夢や幻の如く)水の泡、影のように消え去る、実体のないものです。草葉に濡れる朝露が太陽に照らされてすぐになくなるように、又、雷が一瞬光り、鳴つて後かたを残さないように、全ては、はかないものです。常にこのような正しい観を持ちなさい」

人は必ず死ぬものであり、そのさだめは一切の存在が免れ得ないのです。「人生は短く、かつ一度限りのものです。この事実を厳粛に受け止め、「全てのいのちを大切に生きてしましよう」というのが、お釈迦さまのみ教えです。「(人はついに死ぬものであるからこそ) 生きることの有難さを噛みしめ、(人生は短い故に) 今日一日、今一時を何もこのように大切に致します」。

このような決意を新たにし、その上で、自分自身にしか描くことのできない「夢」を、現実のものにする努力をしましよう。「夢」という一字に、願いをこめて、新年をお迎えしたいものです。

